

匹見町埋蔵文化財調査報告書第32集

—三葛地区基盤整備促進事業に伴う発掘調査報告書—

# 五百田遺跡

2000年3月

島根県匹見町教育委員会

—三葛地区基盤整備促進事業に伴う発掘調査報告書—

# 五百田遺跡

2000年3月

島根県匹見町教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、美濃郡匹見町土地改良区の委託を受けて、匹見町教育委員会が平成11年度に行った三島地区基盤整備促進事業に伴う、五百田遺跡の発掘調査の報告書である。

2. 調査は、島根県教育委員会文化財課の指導と協力を得て、次のような体制で実施した。

調査主体	匹見町教育委員会	
調査員	匹見町教育委員会文化財保護専門員	渡辺 友千代
調査補助員	匹見町教育委員会主事	山本 浩之
	匹見町埋蔵文化財調査室	栗田 美文
調査協力者		大賀 幸恵 大谷 真弓 渡辺 啓 菅藤 美代子
調査指導	島根県教育委員会文化財課	
	山口大学人文学部教授	中村 友博
事務局	匹見町教育委員会教育長	寺戸 等
	匹見町教育委員会次長	渡辺 隆(平成11年8月31日まで) 大谷 良樹(平成11年9月1日から)
発掘作業員	栗田 定 森脇 雅夫	栗川 勉
	藤本 和 正 大谷 ミツコ	大谷 幾子

3. 調査に際しては、美濃郡匹見町上地改良区をはじめ、島根県教育委員会文化財課に終始多大な協力をいただくとともに、山口大学人文学部の中村友博教授から一方ならぬご教示を得たことに対し、ここに合わせて感謝に意を表したい。

また、発掘現場においては、土地所有者の大谷ヨリ氏をはじめとし、地元の方々にご協力とご理解を得るなど、また種々において本町土木課の青柳技師には特別にお世話になったことに対してお礼を申し上げたい。

4. 今回の調査において、柱穴遺構-P、土坑状遺構-SKと略号している。なお、現場あるいは編集に利用した現地図面は、美濃郡匹見町上地改良区の協力を得てた1/1000の縮尺のもとであり、また位置図などは縮尺1/25000を利用した。

編集にあたっては、大賀幸恵・大谷真弓・渡辺 啓・菅藤美代子らが図化するなど分担し、執筆・編集は渡辺友千代・栗田美文が行ったものである。

# 目 次

第1章 発掘調査に至る経緯と経過 .....	(渡辺友千代) .....	1
第1節 調査に至る経緯.....	.....	1
第2節 調査の経過.....	.....	1
第2章 地図の環境 .....	(渡辺友千代) .....	2
第1節 地形的環境.....	.....	2
第2節 歴史的環境.....	.....	2
第3章 調査概要 .....	(栗川 美文) .....	5
第1節 はじめに.....	.....	5
第2節 調査区の設定.....	.....	5
第3節 層序と層位.....	.....	7
第4節 遺構 .....	.....	11
1. 遺構と遺物包含層 .....	.....	11
2. 遺構検出状況 .....	.....	11
第4章 出土遺物 .....	(渡辺友千代) .....	16
第1節 はじめに .....	.....	16
第2節 実測遺物 .....	.....	18
1. 縄文土器 .....	.....	18
2. 瓦器・上師・須恵質土器 .....	.....	22
3. 石器類 .....	.....	22
第5章 小結 .....	(渡辺友千代) .....	23
第6章 付録 .....	.....	25
おもな遺跡の消長表 .....	.....	25
発掘調査報告書一覧表 .....	.....	26

## 挿図・図表目次

第1図 位 置 図 .....	2
第2図 位置と周辺の遺跡分布図 .....	3
第3図 地形断面図 .....	5
第4図 遺跡配置図 .....	6
第5図 調査地区名図 .....	7
第6図 土 層 図 .....	8
第7図 遺構指示図 .....	10
第8図 遺構断面図 (1) .....	11
第9図 遺構断面図 (2) .....	12
第10図 遺構断面図 (3) .....	12
第11図 遺 構 図 .....	13
第12図 遺物分布図 .....	14
第13図 土器実測図 (1) .....	17
第14図 宿毛式系の口端部形態図 .....	18
第15図 上器実測図 (2) .....	19
第16図 土器実測図 (3) .....	20
第17図 石器実測図 .....	21
第1表 遺構計測表 .....	9
第2表 出上遺物集計表 .....	16

# 図 版 目 次

## 図版1 調査地点鳥瞰

## 図版2

- |                    |                    |
|--------------------|--------------------|
| 1. 北東側からみた遺跡の全景    | 2. 合流地の南側にみえる遺跡の全景 |
| 3. 東側からみた遺跡の近景     | 4. A調査区の発掘風景       |
| 5. B調査区の西壁南半（北東から） | 6. B調査区の西壁北半（南東から） |
| 7. C調査区の北壁         | 8. D調査区の北壁（南西から）   |

## 図版3

- |                    |                    |
|--------------------|--------------------|
| 1. D調査区の西壁（南東から）   | 2. 下位層に陥入した4層黒灰色土  |
| 3. 上器の出土状況         | 4. 土器の出土状況         |
| 5. 石器の出土状況         | 6. SK32の表出状況（C調査区） |
| 7. SK03の表出状況（A調査区） | 8. SK07の表出状況（A調査区） |

## 図版4

- |                         |                        |
|-------------------------|------------------------|
| 1. SK03の表出状況（A調査区）      | 2. P02・SK19の表出状況（B調査区） |
| 3. SK06の表出状況（B調査区）      | 4. SK10の表出状況（A調査区）     |
| 5. SK29・SK30の表出状況（C調査区） | 6. P03・SK33の表出状況（D調査区） |
| 7. SK38・SK39の表出状況（D調査区） | 8. SK38の半截状況（D調査区）     |

## 図版5

- |                     |                             |
|---------------------|-----------------------------|
| 1. A調査区の遺構完掘状況（北から） | 2. B調査区のP02・SK19・SK20（東から）  |
| 3. C調査区のSK28（北から）   | 4. D調査区のSK34・SK35・SK36（西から） |
| 5. B調査区の遺構完掘状況（南から） | 6. C調査区の遺構完掘状況（北から）         |
| 7. D調査区の遺構完掘状況（北から） | 8. A・B・C・D調査区遺構完掘状況（北西から）   |

## 図版6

- |                      |         |
|----------------------|---------|
| 1. 繩文土器              | 2. 繩文土器 |
| 3. 繩文土器・瓦器質・上師質・須恵質類 | 4. 石器類  |

# 第1章 発掘調査に至る経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

四見町大字紙祖ロ415-1番地ほかに所在する五百田遺跡は、町域内の南西端に位置する（第1図）。本遺跡は、二葛地区基盤整備促進事業に伴う平成11年度の詳細分布調査において判明したものである。その調査に先駆け、平成11年4月16日に踏査を行った結果、表土に数点の石器剥片・碎片が採取されたのであった。同事業は本年度中に施工予定の急を要するものであったため、同年4月19日付けで文化庁宛に本格調査の報告を提出するとともに、一方で詳細分布調査は（註1）、4月21日から始めて4月30日に終了させ、急務に対応したのであった。

## 第2節 調査の経過

本格調査は同年5月6日から実施したが、傾斜地という立地から削平、攪乱を呈していて、けして良好な遺跡であるとはいえないかった。しかし部分的には包含層も捉えられ、五層の黄褐色粘質土では比較的まとまった宿毛式系のものが出土したのである。

現地調査中の同年8月4・5日には、山口大学人文学部の中村友博教授に発掘指導を得、また平成12年2月15・16日には県教育委員会の守岡正司主事が訪れ、発掘資料から位置付けなどの指導をいただいたのである。なお、現地調査は平成11年8月26日に無事終えたのであった。

（渡辺友千代）

註1　『四見町内遺跡詳細分布報告書類』四見町教育委員会　平成12年3月



発掘作業風景

## 第2章 地区の環境

### 第1節 地形的環境

五百田遺跡が所在する島根県美濃郡匹見町大字紙祖の三葛地区は、町域の南西端に位置する（第1図）。



第1図 位置図

標高は、凡そ500mを測るといった高位にあるため夏でも涼趣で、そのため古くからワサビ作りも特に盛んで、昭和30年代までは木材・製炭業などで栄えた地区でもあった。

### 第2節 歴史的環境

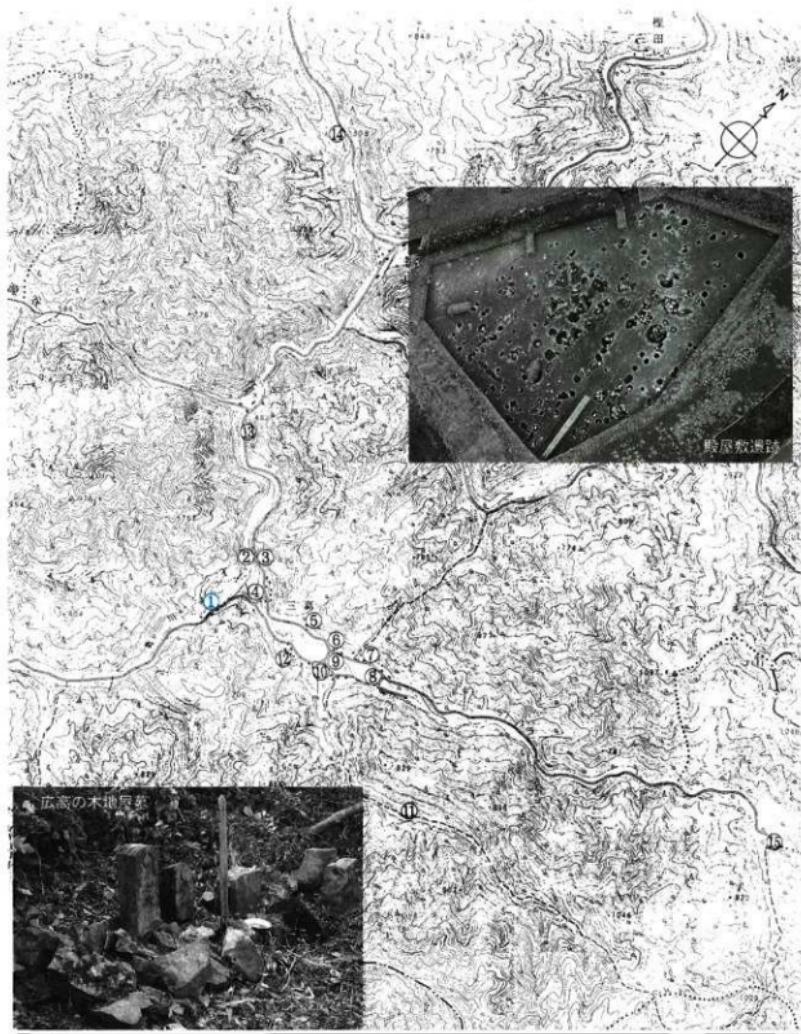
本地区における歴史的環境は、山間地でありながら、しかも狭小地区とはいえ比較的豊富である（第2図）。

例えば、縄文時代早期以前の可能性も考えられる中ノ原遺跡がみられるほか、清左衛門田・殿屋敷遺跡では縄文時代晩期のものも発見されているのである。中でも特に、縄文時代前期を中心とした集石・竪穴住居・土坑・柱穴などの遺構を伴い、1万点を越える上器・石器類が出上した中ノ坪遺跡（註1）は、規模あるいは性格付けなどの多方面からみても、注意されるものである。また、縄文時代前期のものは数点であるものの門田遺跡でも発見されており、このように比較的密度の高い比率で分布している背景には、本地区が重疊たる落葉広葉樹帯という環境下にあって、狩猟採集を基調とした縄文時代にとって、恰好の立地であったことを物語っているのだろうと考えられる。

古代においては、須恵器が発見された新井屋畠遺跡もみられ、杜ノ谷遺跡では中世期の蓬莱山文鏡も出土している。そして中世といえば、土井跡や橋ヶ谷の宝塔、殿屋敷の宝塔も分布するなど、とくに殿屋敷（註2）では戦国期における貴重な資料が出土しており、1地域の支配者階級の様子を知ることのできるものとして貴重な遺跡である。また陣ヶ原古戦場といったものもみられるなど、これら

本地区は、標高約400～1,200mを測る山間地に当たり、南～西側には1,000m内外の中国山地の脊梁が立ちはだかり、その南西部端は広島・山口の2県とに接している。また、地区を貫流する河川は紙祖川といい、その源は南東側の後冠山（1,300m）にあって北西流し、地区の中心部で積木谷川や三葛川の支流を集め、僅かな谷平地を形成して北に転じて流下している。

可耕地といえば、その積木谷川や三葛川が合流する附近にみられるのみで、そこは主に水田として拓かれ、民家や畑地はその周辺の山裾側に点在するという景観にある（第2図・図版1）。



### 凡例

- |           |            |            |          |
|-----------|------------|------------|----------|
| ① 五百田遺跡   | ② 陣ヶ原古戰場   | ③ 杜ノ谷遺跡    | ④ 中ノ坪遺跡  |
| ⑤ 橋ヶ谷の宝塔  | ⑥ 土井跡      | ⑦ 妙玄寺跡     | ⑧ 1門田遺跡  |
| ⑨ 清左衛門田遺跡 | ⑩ 眼屋敷遺跡    | ⑪ 積木谷の木地屋壁 | ⑫ 謂訪城跡   |
| ⑬ 中ノ原遺跡   | ⑭ 加冷谷の木地屋壁 | ⑮ 広高の木地屋壁  | ⑯ 新井屋畠遺跡 |

第2図 位置と周辺の遺跡分布図



中ノ坪遺跡から出土した土器

註1 「石ヶ坪A遺跡」(第31集) 匝見町教育委員会 2000年2月

註2 「中ノ坪遺跡概要」(第28集) 匝見町教育委員会 1999年3月

註3 杉本壽『木地師支配制度の研究』(㈱ミネルヴァ書房 昭和47年3月20日)

は特に緊張した戦国期において、領界の接境地という本地区の立地性が強く影響しているものと思われるのである。

また近世期で顕著なものは、豊富な山林を利用した木地師の逗留地跡であろう。『木地師支配制度の研究』(註3)によると、本地区内では「三葛」いう以外に、古道・伊源谷・三坂谷・積木谷・餅ケ谷・笛山などの具体的な逗留地の小字地名、そして人物名が掲記され、該当世期に通算して120余名がいたことがわかっている。これらのうち、具体的墓標として残っている積木谷・加冷谷・広高の木地師の墓石は周知の遺跡であり、本地区的地域性をよく現しているものといえよう。

(渡辺友千代)

## 第3章 調査概要

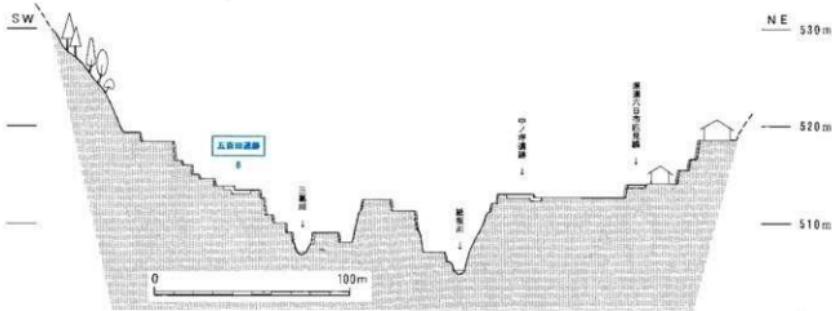
### 第1節 はじめに

地名をもって五百田と命名した本遺跡は、島根県美濃郡宍見町大字紙祖口453番地ほかに所在し、そこは三葛地区の南東側に位置する（第1・2図・図版1）。

本遺跡は、120m北東側を西流する紙祖川と、東側を北流する三葛川とが相会して形成された河岸段丘に立地（第3図・図版2-1～2-3）するが、西側は山地とつづき傾斜地を成しており、遺跡はその山裾に数段からなる水田において、平成11年度の分布調査で発見されたものであった。

その分布調査は、山裾に数段からなる水田を対象地として行われたもので、そのうち特に緩傾斜に形成されていた3段の水田に、2mの方形区を任意に6箇所を設けて行なったのである。このうち三葛川寄りの南東側の調査区から多少の遺物が出土したことによって、遺跡であることが判明したのであった。

圃場整備事業と発掘調査が同年度に併行して実施されるという切迫した状況であったため、分布調査において遺物の出土したA・B区を中心に精査し、5月には本格調査へと切り替えて実施して対応したのであった（図版2-4）。

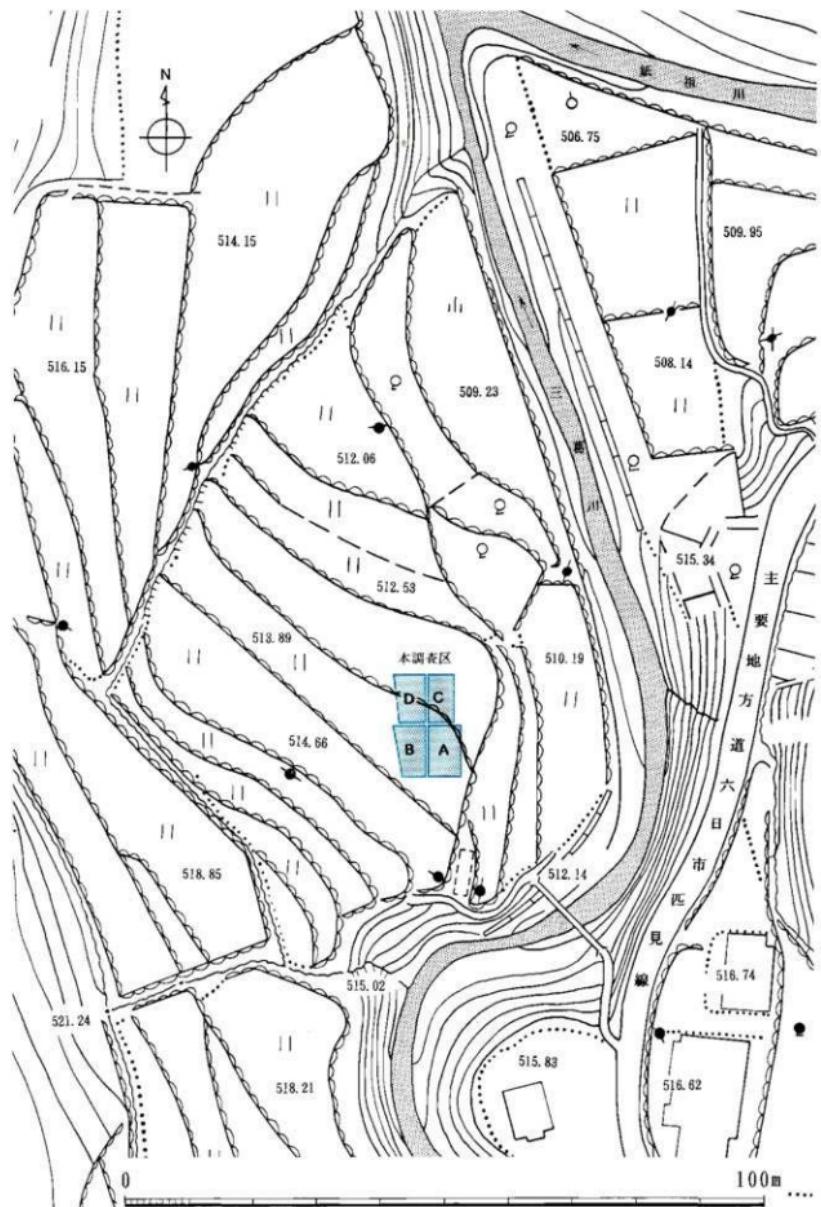


第3図 地形断面図

### 第2節 調査区の設定

分布調査でのA区を設けた水田の表面標高は513.89m、B区は513.48mを測って、両者には約40cmの高低差があった。このうちA区を設けた上段側には数点の土器・石器剥片などが確認されたため、また水田の高低差なども考慮しながら、その位置を中心に調査区を設けることにしたのである。

まず基点とするものを上段水田の東に任意に設けることにし、そして基点から磁北方向に15m測って、基準線を設けることから始めたのである。そして北杭を起点に、西に向かって10m測って北西杭を設けた。さらに南西杭を設定するため、南西面を斜行する石垣築地に余地をのこして、基点から西方に7.3m測った地点に設けることにしたのである。したがって石垣築地などの地形を考慮しながら、北



第4図 遺跡配置図

東杭から南西杭を15.7mの直線で結ぶといった変則的な区画となったのである（第4図）。

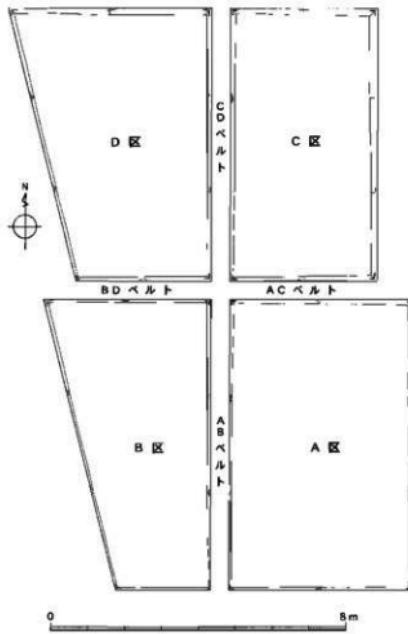
そうした台形状を呈した調査区には、南北・東・西方向に幅50cmのセクションベルトを設け4分割とした。これらの4区画したものは、アルファベットの大文字を用いて、上流側の河寄りからZ形の方向順にA・B・C・D区と呼称することにしたのである（第5図）。さらにこれらの調査区のうち、掘削の中盤において、南半側の2区（A・B区）からも遺物が確認されたため、その両区を一部拡張することにした。それはまずA区の東・南辺を幅1m拡げ、またB区も同様に西・南辺へと拡張したのであった（第5図）。その結果、調査の平面的面積は153m<sup>2</sup>となった。

### 第3節 層序と層位

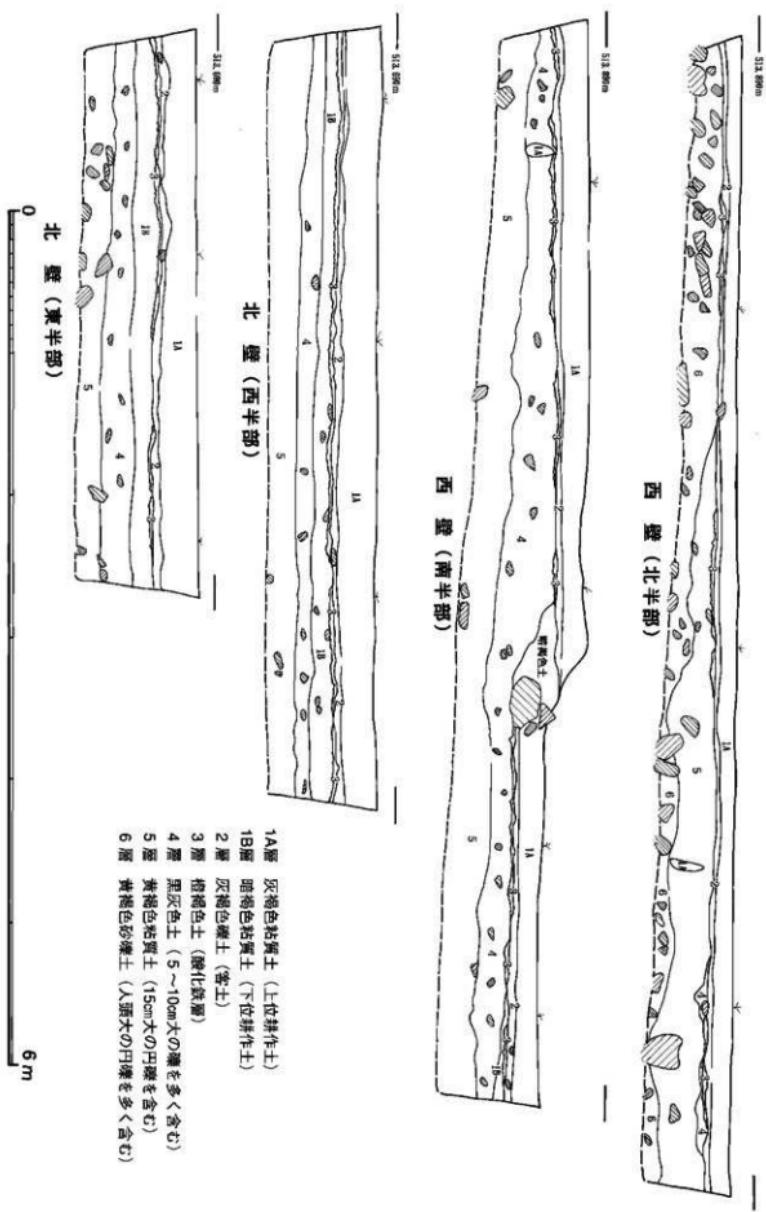
本遺跡における基本的層序は、1層の水田耕作土（上・下位のものに分層）、2層の灰褐色小礫土（客土）、3層の橙褐色土（酸化鉄屑）、4層黒灰色土、5層の黄褐色粘質土、6層の黄褐色砂砾層（河床砾）の順で堆積していた（第6図・図版2-6～2-8）。

基本的には上述のように堆積していたと想定しているが、調査区の北・南半部などでは差異がみられたのである。とくに南半部のやや高位であったB区域では、4層黒灰色土、5層黄褐色粘質上の尖滅あるいは欠除するといった状況からみて、水田造成等によって上位部に深度の高い削平が成されたものと推察される。その逆に、北半部では基盤層が北東方向に下がっていくに連れて、その4・5層は厚くなっていることから、基本的層序でなかったかと推察している。ただし北端の一部には、1層とした耕作土が2層の客土・3層の酸化鉄屑を挟んで堆積しており、以前に水田の再構築（マチオシ）が成されたものと捉えられたのである（第6図・図版2-8）。以下、基本的層厚にしたがい上位から下位へと、その状況をみていくことにする。

まず表土の水田耕作土としての1層は、粘質性の灰褐色土である。層厚は12～28cmを測り、総体的に三葛川下流方向である北東面に向かって厚く堆積していた。これは原地形の斜度によるもので、水田耕作土にしては厚薄差がみられた。つぎの2層は、灰褐色をした2～5cm大の小礫を含んだ底土としての客土である（第6図）。層厚は2～8cmを測り、北半部が若干厚いものの、全体的にはほぼ水平に堆積していたのである。これらの1・2層には削平などによって、搬入されたと思われる縄文期の上器・石器類のほか、中世・近世期のものと思われる陶磁器・金属器類などの遺物が80点余りが採集された（第2表）。



第5図 調査地区名図



第6図 土層図

3層は、酸化鉄が含浸した棕褐色土であった。その上面部は上位層に沿って比較的平坦であるが、下部は含浸差がはげしく、その層界は凹凸する。層厚は、2~4cmを測り薄解であり、尖滅や欠陥部分もみられる。そしてその下位は有機質の黒灰色土で、5~10cmの角礫を含む4層は、北半側の深層部では約40cmを測るが、南側へ向かっては希薄となり、尖滅部分もみられた（第6図）。これらの堆積状況から、とくに南北側のB調査区周辺において深度に至る削平が行われたものであろうと考える（第6図・図版3-1）。本層は人の行為以前においては、総体的に原地形に沿って平均な堆積を形成していた層位と考えられる。なお本層の、上位部から土器を中心とした小・細片82点ほどのものが出土し、また下位部からは石器類などの繩文遺物が検出された（第12図・第2表）。そして遺構は、下層の5層との層界にみられたが、混在するといった遺物出土状況からみて、2つの文化層が形成されていたものと捉えられる。しかし、遺構については同一層内ということもあってか、同位部では把握することはできなかったのである。ただしD区で検出されたビットには上位部の黑色系が陥入していたので、土器層に伴うものと想像している。

5層は、粒子が極めて小さく、粘質性があつて強く結びた感じのする黄褐色粘質土である。その中には15cm大の円礫、また一部角礫もみられるなど、層状あるいは山土を含む土質から判断すると、これは遺跡の南側の祇園川の氾濫によって流出した上石流の崩壊土ではないかと考えられる。その層厚は30~40cmを測って、比較的厚い層位である。とくに南北側（C調査区）は厚く、その反面、北半側（B調査区）に向かっては尖滅し、欠陥している部分もみられた（第6図・図版2-5）。つまり北東方向に傾斜しているため、標高が高かったと想定されるB調査区周辺が、水川造成などにおけるところの水平を成すた

第1表 遺構計測表

通構名	短 径 cm	長 径 cm	深 さ cm	表面高 m	編 號	遺構名	短 径 cm	長 径 cm	深 さ cm	表面高 m	備 考	
P01	21.0	38.0	16.0	513.050	S K17	—	68.0	16.0	513.050			
P02	18.0	20.0	4.5	513.050	S K18	—	—	24.0	513.020			
P03	26.0	28.0	6.0	512.910	S K19	32.0	56.0	13.0	513.380			
P04	27.0	43.0	23.0	512.860	炭化物	S K20	46.0	100.0	13.0	512.340		
P05	18.0	19.0	17.0	512.810	2層?	S K21	—	39.0	12.0	512.950		
P06	24.0	34.0	14.0	512.720	炭化物・灰	S K22	31.0	51.0	11.0	512.990		
P07	27.0	32.0	26.0	512.860	炭化物	S K23	30.0	131.0	18.0	512.900		
P08	21.0	24.0	17.0	512.820	炭化物	S K24	54.0	91.0	19.0	512.920		
P09	28.0	32.0	18.0	512.750	炭化物	S K25	60.0	96.0	14.0	512.890		
S K01	—	132.0	10.0	513.380	S K26	28.0	69.0	23.0	512.860	炭化物		
S K02	70.0	112.0	36.0	513.340	S K27	33.0	50.0	11.0	512.840			
S K03	71.0	154.0	21.5	513.365	炭化物	S K28	80.0	248.0	17.0	512.790	炭化物	
S K04	—	36.0	513.300	S K29	30.0	39.0	13.0	512.720				
S K05	68.0	128.0	18.0	513.330	S K30	—	—	18.0	512.720			
S K06	226.0	292.0	—	S K31	28.0	44.0	25.5	512.675				
S K06-1	—	38.0	513.200	S K32	26.0	54.0	37.0	512.750	炭化物			
S K06-2	—	—	38.0	513.360	S K33	28.0	48.0	15.0	512.360	2層?		
S K36-3	—	—	28.0	513.250	S K34	51.0	152.0	17.0	512.990			
S K07	130.0	160.0	34.0	513.270	炭化物	S K35	49.0	89.0	19.0	512.980		
S K08	36.0	54.0	14.0	513.180	S K36	60.0	—	19.0	512.930			
S K09	41.0	52.0	24.0	513.210	S K37	82.0	108.0	25.0	512.900	炭化物・灰		
S K10	—	—	16.0	513.200	S K38	86.0	136.0	38.0	512.810	炭化物・灰		
S K11	52.0	137.0	36.0	513.180	S K39	60.0	124.0	14.0	512.780	炭化物		
S K12	28.0	36.0	9.0	513.130	S K40	20.0	74.0	15.0	512.740	2層?		
S K13	54.0	76.0	20.0	513.110	S K41	30.0	40.0	19.0	512.770			
S K14	49.0	118.0	35.0	513.080	S K42	32.0	40.0	26.0	512.750	炭化物		
S K15	38.0	61.0	31.0	513.050	炭化物	S K43	—	—	21.0	512.720	炭化物	
S K16	42.0	71.0	—	513.090	(—)	—	—	—	—	—	不詳を示す	



第7図 遺構指示図

も捉えられる不整形を呈するものが多く、なかには遺構として捉え難いものもみられたのである。

6層は黄褐色の砂礫層で、河床疊と想定される層序である。層厚については下位を掘削していないので明らかでないが、基盤層であろう。南半側の調査区に露出した上位部（第6図・図版2-5）を見るかぎり、人頭大の河原石を含み、砂礫と円礫におおわれており、文化層とは捉え難い層と判断し以下の掘削を止めた。

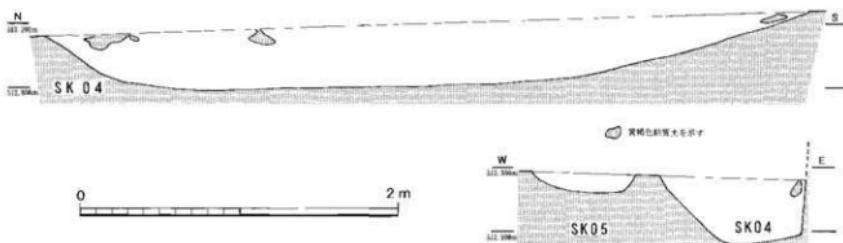
## 第4節 遺構

### 1. 遺構と遺物包含層

本遺跡の遺物包含層は、大きく別けて4期のものが認められた。その1つは1・2層で採集した陶磁器・金属器などの近世期のもの、そして瓦器・土師質器などを包含する3層を中心とした中世のもの、4層を中心とした古墳末から中世始めのものと、また4層下半以下から5層にかけて出土した縄文期のものであった（第2表）。このうち遺構は後者の2期のものと想定される遺構が検出されたが、前者の2期については遺構は検出されなかったので、本節では後者の2期の遺構を中心に、記述することにする。

その検出された第1期とする縄文の遺構は、4層の黒灰色土と5層の黄褐色粘質土との層界で確認された。それらの遺構の大半には、文化層として捉えられた4層黒灰色土、そしてブロック状の5層が嵌入（図版3-2）していることから、構築面は4層下部に存在したものと考えられる。また、第2期とする古墳末から中世始めのものは、4層内で検出されたものであるが、黒灰色土のうちでも濃厚な上位部の土質が陥入していたことから、そして該当期の遺物の出土状況も合わせて考えると、明確的ではないが、その構築部は4層上位部にあったと理解している。

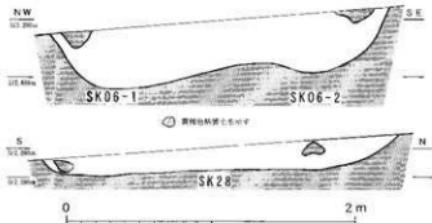
したがって、2期の遺構が相伴する可能性がでてきたが、しかし埋土が単一層であったために構築面である4層のうちでも特に第2期としたものは把握できたとはいえず、レベルとの遺物出土状況から識別するように務めたが、それが明確であったとはいえない。なお遺構については、その形状から柱穴状のものをP、土坑状のものをSKと略号することにしている（第7・11図）。



第8図 遺構断面図(1)

### 2. 遺構検出状況

南東側に設定したA調査区では、Pと略号した柱穴状のもの1穴、その土坑状のもの18基が検出された（第7図・第1表・図版3-7・3-8・4-1・5-1・5-8）。これらは4層と5層との層界



第9図 遺構断面図(2)

層との層界に18基を捉えることができた。しかし土坑といっても坑の内外に15~25cm程を測る半円形の自然壁が数多く露頭するため、それらの坑形を明確に把握できず、難済したのであった。したがつて、それらの石体は意図的でないと判断し、図化していない。それらは恐らく自然流土によって搬入したものと思われるからである。

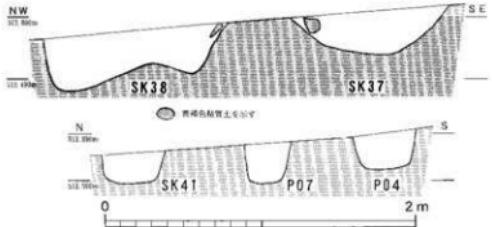
そしてA調査区ではB調査区は別にして、高位であったために上位層が削平され（第6図・図版2-5）、一部を除いて5層まで削平されていた状況からみて、またその下位部の検出ということから、第1期とした縄文遺構であったと想定している。このうちSK07・SK15では炭化物が検出され、またSK04の検出残存部の最大径は約5mを測るもので、竪穴住居の可能性も考えられた。ただし東側は石垣墓地で陥込んでいたため、拡張して精査していないので明らかではない。同坑の深さは約40cm、坑壁は緩やかで、形的には住居址といえるものではなかった。いずれの土坑も同様であるが、同坑には4層の黒灰色土が陥入し、また部分的に5層の黄褐色土が陥入していたのである（第8図）。

B調査区は、P02・SK19・SK20が検出され（第7図・図版5-5）、東壁にはA調査区のSK06と略号した土坑が介入していた。これらも5層から6層に至る陥入状況から縄文期の遺構であろうと考えられる。なお遺構は、他調査区の検出したものより少ないが、その逆に縄文土器は最も多く、不可思議な状況を呈していたのである。

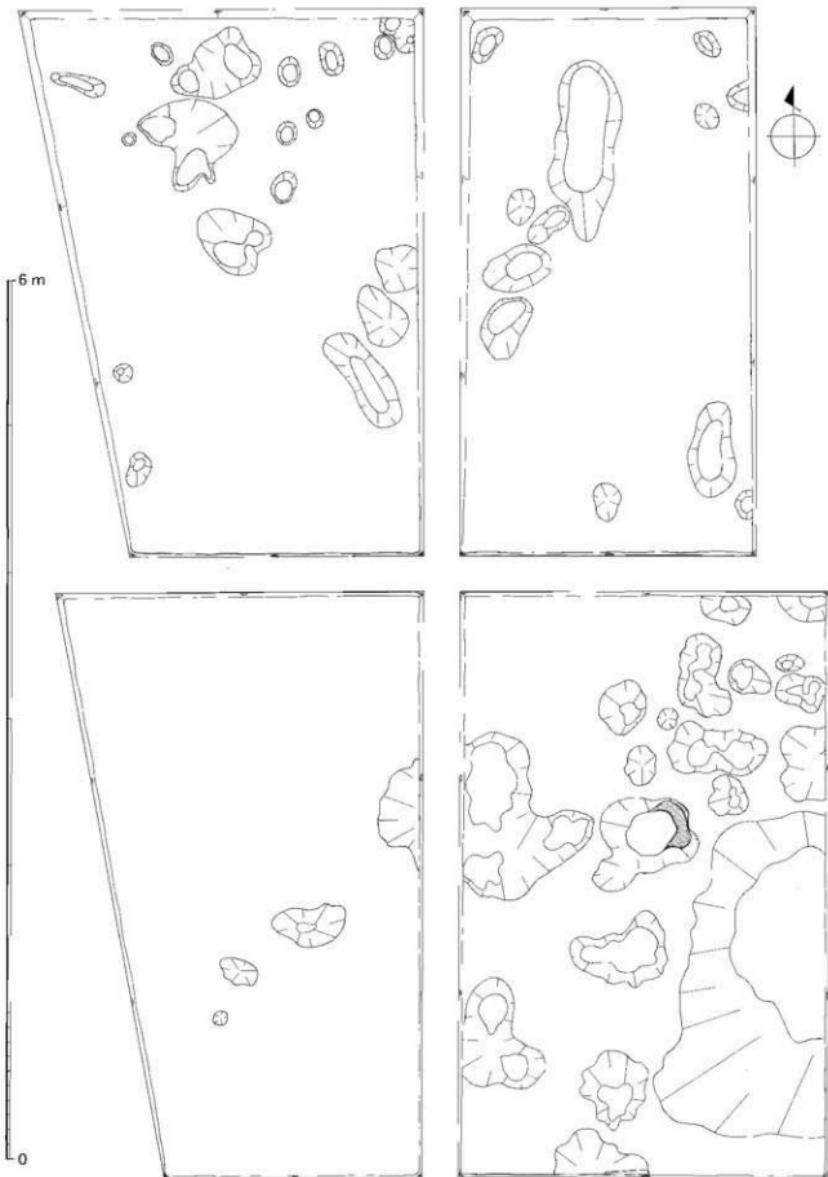
C調査区はA・B調査区と比べて、表面標高は40cm、また4・5層との層界面は約60cm低いレベルであった。土坑状の遺構は12基が検出され（第7図・図版5-6）、その検出面にはA・B調査区と同様、円・角礫が充填し、大きいものでは径70cmにおよぶものもみられた。また出土遺物は、第1期とした縄文、第2期の土師器類は、A・B調査区に比べて少なく、とくに縄文期のものは著しかった。ただし遺構は、5層から6層にかけて陥入するものであるため、縄文期のものと想定している。このうちSK28（第9図・図版5-3）は、短径80cm、長径248cmを測り、長形の楕円を呈して深さは17cmと浅い。坑内には4層の黒灰色土が陥入し、ところどころに5層の黄褐色土が陥入し、坑底には炭化物もみられたのである。また炭化物は、SK26・SK32でもみられたが、焼上などが確認で

に検出されたものである。このうちのP01は区内の北東端に確認されたもので、長径約38cm、深さ16cmを測り、遺構内には4層の黒灰色土が陥入していた。その坑形から柱穴であったと想像されるが、その痕跡が1穴ということもあって、その機能的用途は明らかではない。

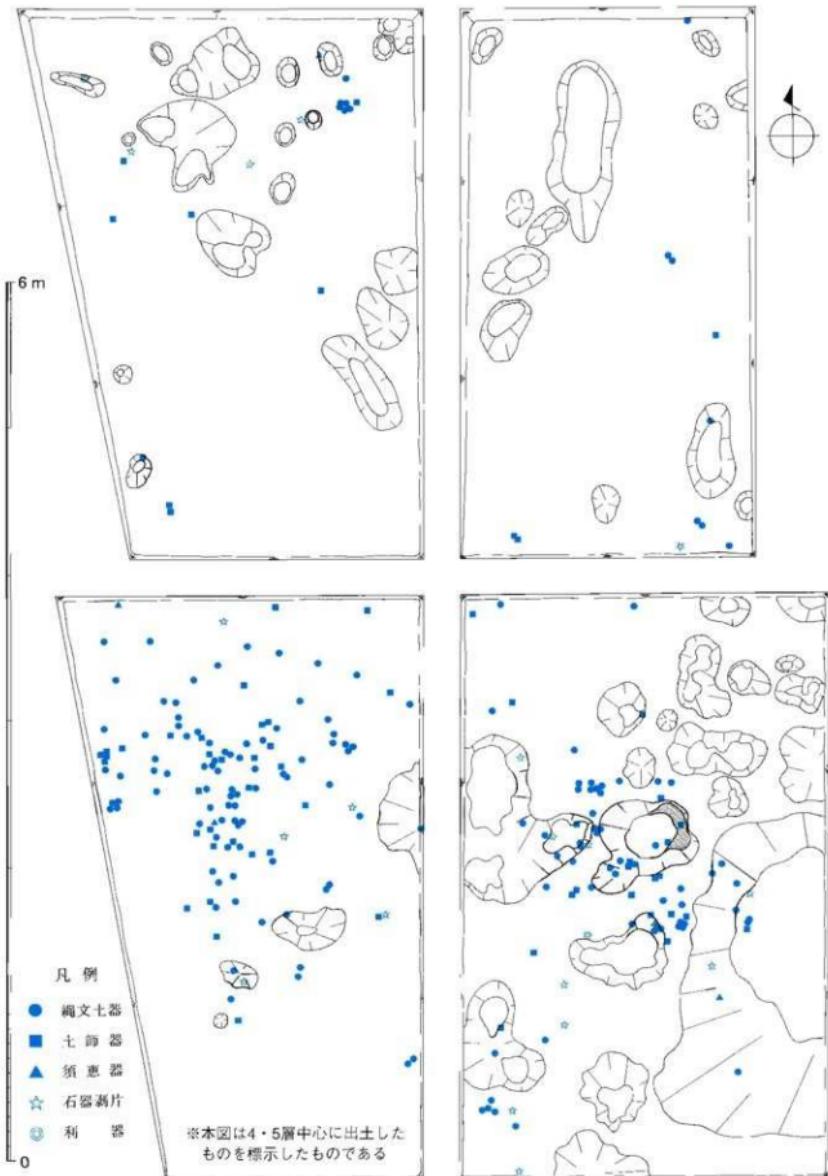
また土坑は、とくに本区において4・5



第10図 遺構断面図(3)



第11図 遺構図



第12図 遺物分布図

きなかったので、地床としての機能をもったものかは定かでない。

D調査区は、柱穴状のビットが7基、土坑状のものが11基検出された（第7図・図版5-7）。これらの遺構は、東半部において4・5層の層界から6層にかけて陷入したもので、縄文期のものと想定される。しかし西半部のP03・SK33・SK40などのやや高位であったものは、第2期とした古墳末期から中世初めのものである可能性がある（図版4-6）。それは坑内に4層の上位部（黒色）のものが陷入していたこと、そしてその色調の見極めが4層の中位部で認識できたことによるものである。ただし一部を除いて、はっきりと確認できたものではなく、その傾向がみられたという程度としておきたい。

いずれにしても今回の調査では、傾斜地ということもあり、そこには流出的または崩壊土的な堆積層を呈していたため、検出には困難を極め、一方そうした状況から遺物との整合性なども追求することができなかったことを危惧している次第である。

（栗田 美文）



杜ノ谷遺跡の蓬来山文鏡

第4章 出土遺物

第1節 はじめに

本遺跡における出土遺物は、多い順に並記すると、175点の繩文上器（36.5%）、103点の安山岩系石器剥片（21.5%）、82点の土師器（17.1%）、40点の陶磁器（8.3%）、19点の土師質・須恵質・瓦器質（4.0%）、各9点ずつであった石鐵・須恵器・金属器（1.9%）、6点の乳白色系の黒耀石（1.2%）、5点の黒色系黒耀石（1%）などであった（第2表）。

このほか縄文期の利器においては磨石（2点）・磨製石斧（1点）・打製石斧（1点）・石錘（1点）・石匙（1点）、そして削器（2点）・楔形石器（1点）が出土している。また石材では安山岩・黒曜石のほか利用されたと想定されるチャート（2点）、水晶（1点）の剥片も含まれている。そして古墳末期のものと想定した上師器・須恵器はいずれも細片ばかりで、これらは4層以上上の層位に、一部遺構を伴って出土したのである。そのほか中世期に位置付けられる瓦器質などは、1・2層に出土したものもみられたが、その基本的包含は3層であったと捉えられるものである。そして陶磁器・金属器類は1・2層という上位層に出土したもので、近世あるいは現代に至るものであり、遺構は勿論のこと具体的な生活誌は明らかにできるものではなかった。以下、それらの特徴を抽出出し、とくに遺構を伴い、比較的多く出土した縄文遺物を中心にみていくことにしたい。

なお1・2層の人が床といえる上位床のものは、ただ採集するといった程度としたが、3層以下の遺物については、層位ごとに原位置方式で採り上げたものである。

第2表 出土遺物集計表



第13図 土器実測図 (1)

## 第2節 実測遺物

### 1. 繩文土器（第13～16図・図版6-1～6-3）

1～20は縄文土器で、このうち1～18は口・頭・胴部片、19・20はその底部片である。これらは数点において食出るものもみられるが、凡そ松ノ木式土器群に包括できるものであった。

これらのうち1～4は、B区の5層から出土した粗製系のもので、このうち1～3は、口唇部に棒状施文具による押圧の刻みが付けられたもの。いずれも器形は外反するものと思われ、そのII端部は肥厚させている。そして1～3の外面部には横走の弧状気味の沈線が施され、1～4とも条痕調整の後、外面部はナデである。いずれも内外面とも灰褐色を呈し、胎土には2～3mmの大砂粒を含み、焼成は普通。施文や調整などからみて、中津式土器系であろうが、このうち3・4は松ノ木式の古段階に属するものかも知れないと考える。

5～8は錦崎式の特徴をもつもので、5はB区、6～8はA区の5層から出土したもの。このうち5は、頭部の下半片と思われるもので、胴部に向かって膨らむ一方、頭部から口縁部には短く肩折する様子が看取できるもの。外面部には縄文、そして磨消部分とが2本沈線を単一として横走させたものである。ただし本片では看取することができないが、おそらく頭部に向かっては渦巻文を呈しているものと思われる。器内はやや厚く、内外面ともヘラ磨きを施し精緻である。胎土には砂粒を含むが、焼成は堅緻で、色調は橙褐～褐色を呈する。6は、粗製系の頭部。外面の肩折部に幅広の沈線を有し、器内は1.2～1.4cmを測って厚手で、内外面ともナデ仕上げである。胎土には2～3mmの大砂粒を含み、色調は灰～褐色を呈している。

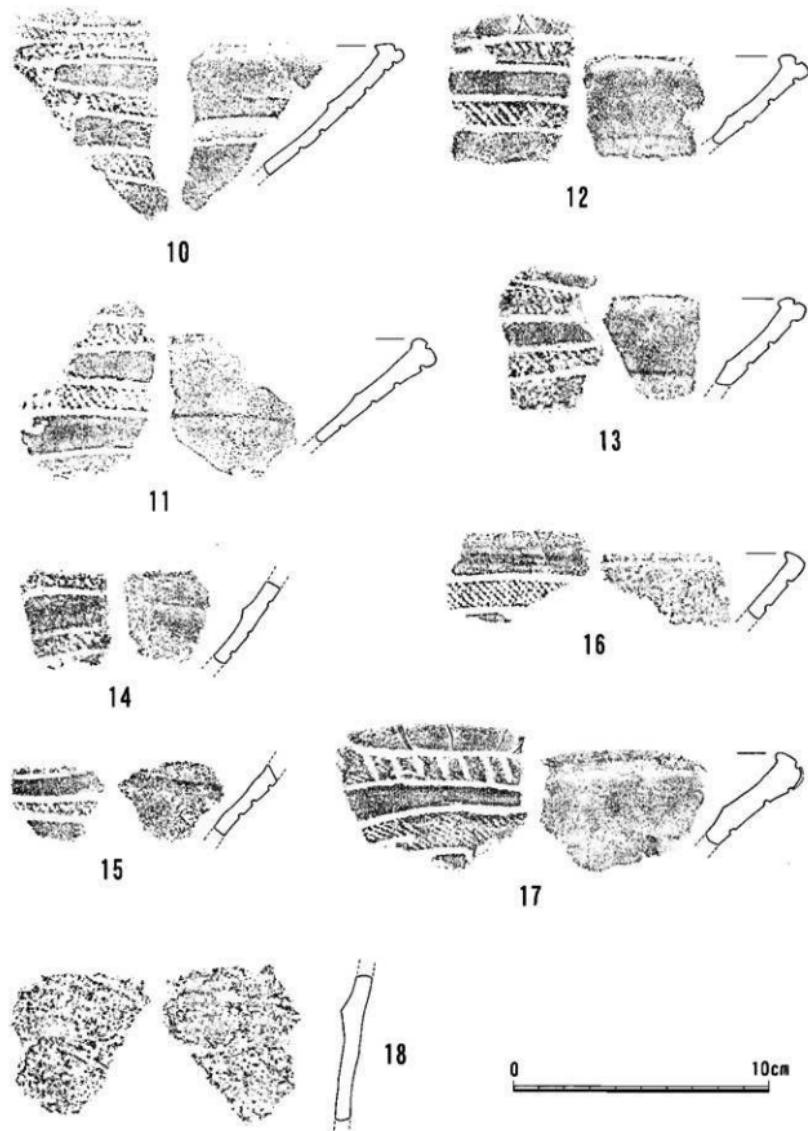
7は、粗製系の胴部片と思われるもので、外面部に2本沈線で区画する縄文・磨消を單一とした施文帯がみられるが、このうち縄文帯は明確でない。内面は条痕調整のままで、その色調は橙色、外面は褐～暗褐色を呈し、焼成は良好である。8は、内折する橋状把手をもった口縁部片。II端部の断面は三角状に肥厚させ、その外面部に橋状把手が貼り付けられたものである。そして橋状把手の上部にはハの字状の圧痕文が複集合され、その頭部には2本の渦巻き、また下部には横走する2本の沈線が施文されている。胎土には砂粒を含み、色調は橙褐色を呈するが、部分的に煤が付着する。9は、A区の5層から出土した突起をもった口縁部。外面部には縄文地の後、弧・楕円文の沈線が施文されているが、その運行端は鋭角的である。そして幅広につくられた端部の断面は三角形を成し、そこには菱状の刺突列点文で区画し、その空間は磨かれている。器形は強く広がった浅鉢系で、底部に向かっては薄くなっている。内面側は精緻なヘラ磨きがされ、黒褐色、外面側は橙色を呈する。松ノ木式を3段階（古・中・新）で分類するならば、宿毛式と錦崎式の要素をもった2段階のものであろう。

10～18は、宿毛式に包括できるもので、このうち18以外は総て精製系土器である。そしてこれらは、施文・調整・器形などからみて、同タイプのものとして指摘できることから、一括して説明することにする。ただ宿毛式といつても、とくに口端部に五百田タイプともいえる、極めて短狭期に形成されたと思われる特徴性もみられるので、それらも抽出してみていきたいと思う。

まず器形は、II端部に向かって直線的に広く開き、その器



第14図 宿毛式系の口端部形態図

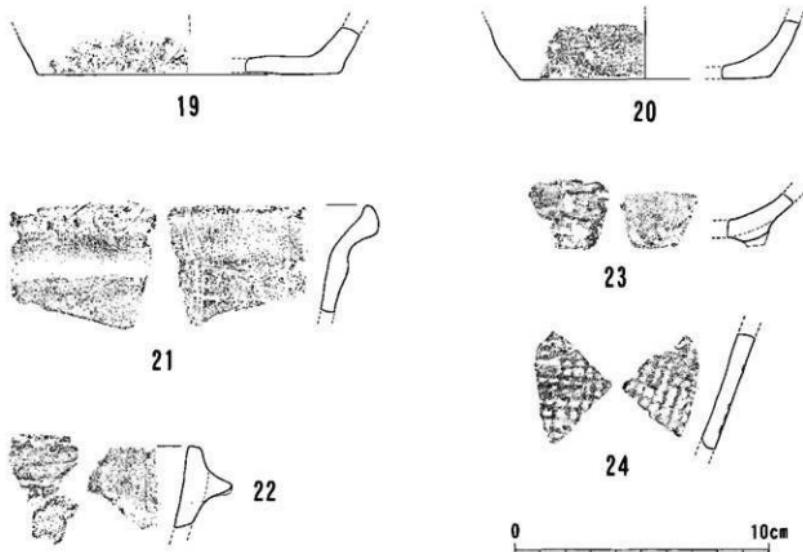


第15図 土器実測図（2）

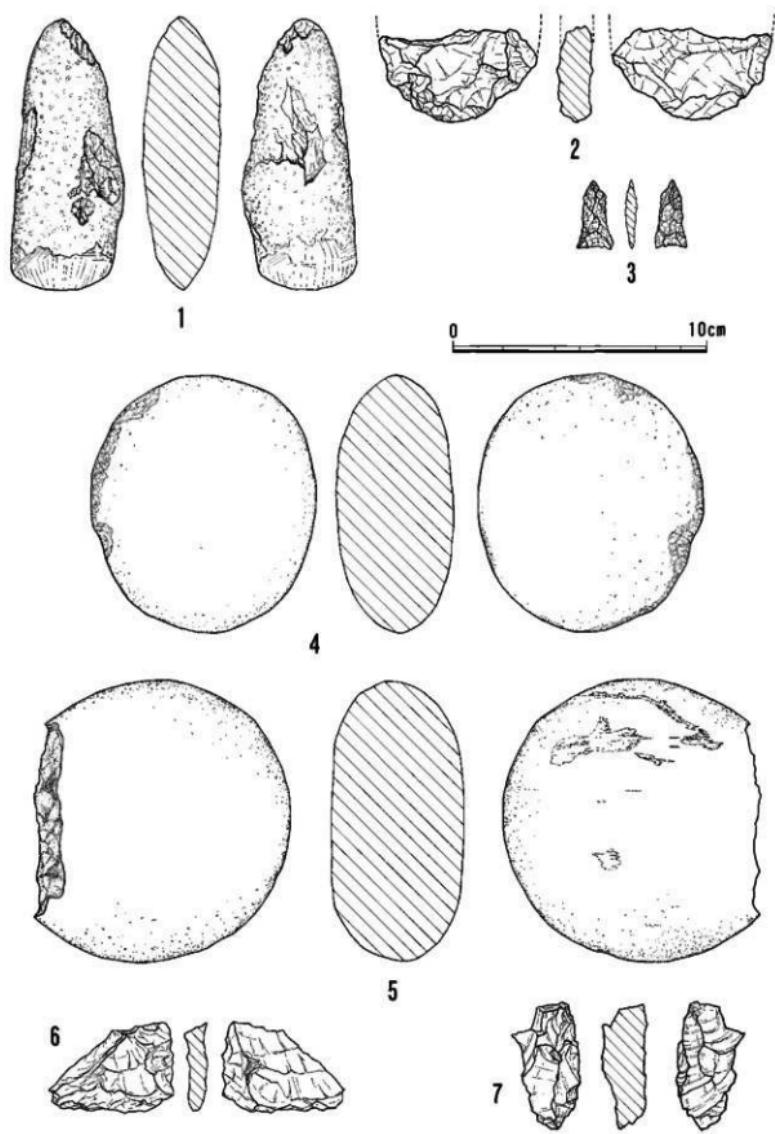
肉は17以外は5mm前後と薄手である。そして口唇部の断面は、外面部に僅か膨らみをみせるものもあるが、内面側に二等辺三角形を呈して内折したものばかりである、ということを特徴とする。そしてその肥厚部が、内面側に向かって丸みおびるものもみられるが、鶯状の嘴をなす10・13・17のほか、16のように抉るようなものもみられる（第14図）。また内面側の下部には鱗状の稜を多用していることも特徴であり、11・12・13のように弱いもの、そして10・17・18のように顕著のものもみられるのである。

これらの外面部の文様は2本の沈線を一对とし、そのVX画内に磨消・縄文帶（RL）が交互に対列して帯状に形成しているが、その端部は10・17のように曲線で結ばれたものもみられる。そして11のように人組文を有するもの、17では口唇外面部に斜向の刻みを有するなど、これらは全体的に、その意匠においては筋毛式である。なお内面の調整はヘラ磨きで丁寧な仕上げ方であるが、18の粗製系のみは、条痕調整である。屈折のない垂直的な頸部片と思われ、全体的に胎上の色調は橙褐色を呈するが、10・17は煤が付着して褐色（胎上は橙褐色）を呈し、焼成も堅緻なものである。

19・20は底部で、前者はBLX、後者はCLXの5層に出土したもの。いずれも平底で、器肉は薄手といえるものである。両者とも条痕調整の後ナデとするが、後者は底部にしては比較的丁寧である。色調は、両者とも橙色を呈していることから、前掲の中津式とした以外の土器に伴うものであろうと考える。



第16図 土器実測図 (3)



第17図 石器実測図

## 2. 瓦器・土師・須恵質土器（第16図・図版6-3）

21~24は、3層以上の上位層に出土した中世後半期のもの。このうち21・22は瓦器質土器で、前者は足鍋などの鍋類の口縁部、後者は茶釜類の鋸部である。うち21は、その口頭部で、短く「く」の字状に屈折し、口唇部の断面は逆D形に肥厚させる。そして内折した頂部は嘴状で、口唇は別にして4mmと器肉は薄い。内外面とも横方向のハケメで、橙褐色を呈し、部分的に煤が付着している。11縁部の形態からみて、おそらく15世紀以降のものであろう。22は、釜類の鋸部で、淡赤色を呈する。調整はハケメ、鋸部以外はナデ仕上げであり、21とも焼成は堅緻である。23は、皿系の底部と思われる土師質のもの。調整はナデ、桃白色を呈して、焼成は軟質的。細片で形態的にも明確でなく、したがって時期の位置付けは難しい。24は、須恵質の胴部片。内外面とも格子形によるタタキで成形の後、ナデで仕上げる。外面は青褐色を呈するが、胎土は茶褐色の色調。時期的位置付けは難しいが、おそらく前述した器物に伴ったものと思われ、中世後半期のものであろう。

## 3. 石器類（第18図・図版6-4）

1は、D区5層に出上した磨製石斧。器長10.5cm、最大の器幅4cm、最大の器厚3.1cmを測り、やや小振りといえる。石材は安山岩質のもので、腐朽して灰青色を呈する。刃部は船状を呈して、角度は鈍い。基部は打製で成形されているが、右縁部に変形がみられ、けして良品形といえるものではない。2は、D区の2層から出土した打製石斧の刃部片で、石材は安山岩質のもの。3は、DI×の5層から出土した安山岩質の石鎌。器長2.6cmを測ってやや長めで、刃は5面から成形された5角形。剥離は丁寧とはいえないが、均整のとれたつくり方である。

4・5は磨石で、前者はAI×の5層、後者はBI×の2層から出土したもの。両者とも花崗岩質のもので、前者はやや灰色おび、腐朽する。いずれも周辺部は部分的に打痕がみられ、敲石とした機能をもち合わせたものと想定される。標旗方向などは看取ることはできないが、背・腹とも平坦おび、スペベスベする。6は、B区の5層から出土した石匙。石材は安山岩質のもので、右辺・ツマミ部を損したものの、腹面側にやや反り、刃部は両面からの剥離で調整するが、腹面側は弱い。7は、石核と思われるもので、D区の耕作上から出土した乳白色の黒耀石。最大の長さは4.7cm、重さ16gを測り、三角錐を呈するもの。

(渡辺友千代)

## 第5章 小 結

本遺跡は、山裾側という傾斜地に立地し、しかも後世によるところの数段から成る水田と化された地点であったため、層序的に捉えることを基本とする考古学上からいふと、けして良好な遺跡であったといえるものではなかった。ただし層序と遺物とが整合的に捉えられる部分もみられ、また一方、地すべり的崩壊土の流入によって、遺構は原形をとどめたものではいえないが、最低限の痕跡だけは捉えることができたのではないかと思っている。

層序と遺物との伴出関係からみると、縄文遺物は、凡そ4層黒灰色土の下位部から5層の黄褐色粘質土の上位部にかけて包含するといった傾向がみられた。また古墳後期から中世初期と想定される上飾器・須恵器類には、おそらく崩壊土の流入によって生じたと思われるが、細・小片ばかりで尖端に値するものではなく、これらの包含層は凡そ4層の上位部から下位部にかけて出土したものであったのである。そして瓦器・土師質のものは、1・2層で採集されたものもあり、これは該当期以外の遺物でもいえることであるが、水田造成などの削平によって搬入したものであることから、これらを別にすると、その基本的包含層は橙褐色土の3層であったことが捉えられる。

これらのことから遺物の増減幅はあるものの、本遺跡には縄文のⅠ期、古墳末期から中世初期に至るものⅡ期、そして中世後半期のⅢ期で形成されていたと想定される。勿論、1・2層のみに採集された近世期以降の陶磁器類の時期は、断片・層序的でないため、除外した上のことであることはいまでもないが、上位層におけるところのⅡ・Ⅲ期においても、それに近い状態であったのであった。例えば、Ⅱ期とした古墳末期から中世初期にかけての十飾器・須恵器は、やや高位であったA・B区に高い比率で出土したものの、該地区では遺構を検出することはできず、その逆にC・D区ではその一部と想定できる遺構を捉えることができたのである。こうした矛盾は、該当期以降を含む、自然あるいは削平などの人為的行為が介入したのではないかと想像する。縄文期の遺物・遺構の出土状況からみて、下位層においては地すべりなどの自然、上位層においては削平などの人為的要因ではなかったかと、層序あるいは出土状況から判断しているのである。以上のことから、けして順調な遺跡であったとはいえないが、ただⅠ期とした縄文のものは、とくに土器において注意すべきものがあるのではないかと考えている。

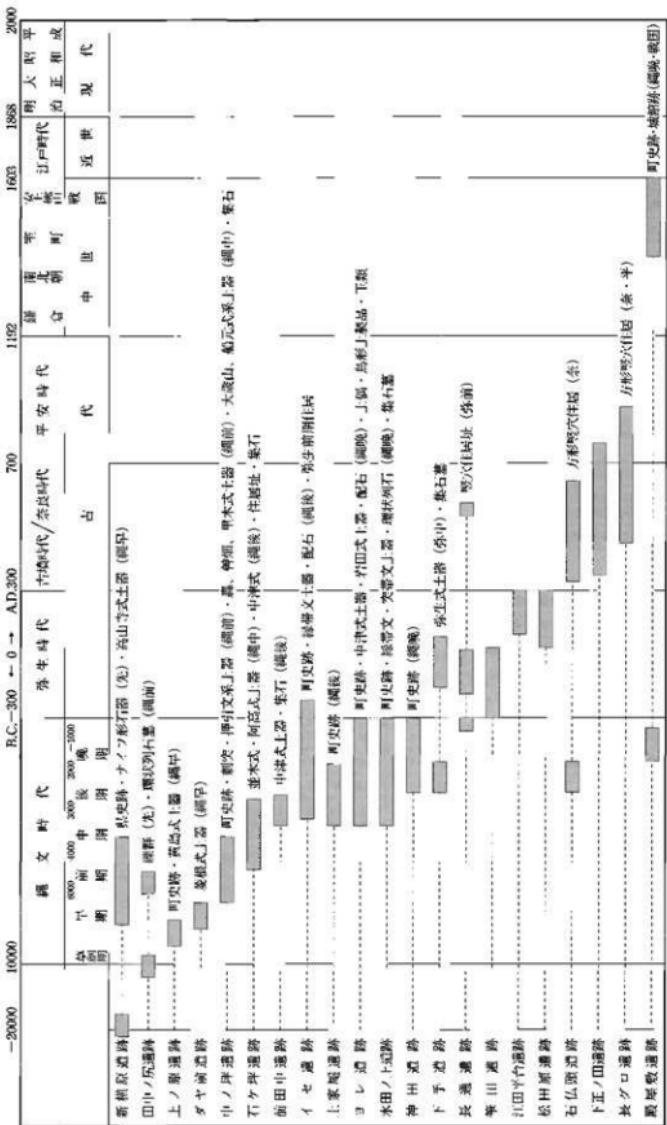
その土器群の中には、僅少の中津式上器を伴うものもみられたが、ほとんどが大柄でいう松ノ木式に包括できるものであった（註1）。しかし松ノ木式といつても、その古段階に当たる宿毛式、あるいは北九州でいう新段階の鐘崎式に併行するものはみられたものの、中段階（口端部・文様形態などから）とする明確なものは捉えられなかつたのである。ただ宿毛式としているものは、口端部が凡そ内側に向かって二等辺三角形状をなしているものがほとんどであることから、口端部が偏平な台形状もしくは正三角形状を特徴とする松ノ木式の中段階への、その萌芽がみえないでもないグループと考えている。つまり宿毛式と分類する五自由タイプは、口端部形態に松ノ木式の中段階への微候をもちながらをも、未だ文様・器形などにおいて、その大部分は宿毛式といえるものであることから、それらは終末期の上器グループではなかつたかと想定しておきたいと思う。

松ノ木式系のうちでも、とくに宿毛式の終末期と想定されるものに拘ってみてきたが、これら松ノ木式として捉えられるものは、胎上の色調が橙褐色系であったということを、特筆しておくべき事実であった。これは採土地あるいは焼成過程などが同一ということであって、親縁関係をもつものと判断されるが、しかしそこには土器の時期的幅と、消長幅が読みとられるので、それはどう意味であろうかなどの疑問がのくる。しかしながら同流域の石ヶ坪遺跡では確認できるものの、これらの中には明確な福田KⅡ式といえるものが見い出せなかったということは、とくに宿毛式上器と併行関係にあるという見方もあるが、両者間には一定の時期差があることを明確にしたことは、大きな成果であったということができよう。

(渡辺友千代)

- 註1 高知県長岡郡本山村教育委員会『松ノ木遺跡Ⅰ』「本山村埋蔵文化財報告書第3集」1992年3月  
高知県長岡郡本山村教育委員会『松ノ木遺跡Ⅱ』「本山村埋蔵文化財報告書第4集」1992年3月  
高知県長岡郡本山村教育委員会『松ノ木遺跡Ⅲ』「本山村埋蔵文化財報告書第6集」1993年3月  
高知県長岡郡本山村教育委員会『松ノ木遺跡Ⅳ』「本山村埋蔵文化財報告書第8集」1996年3月

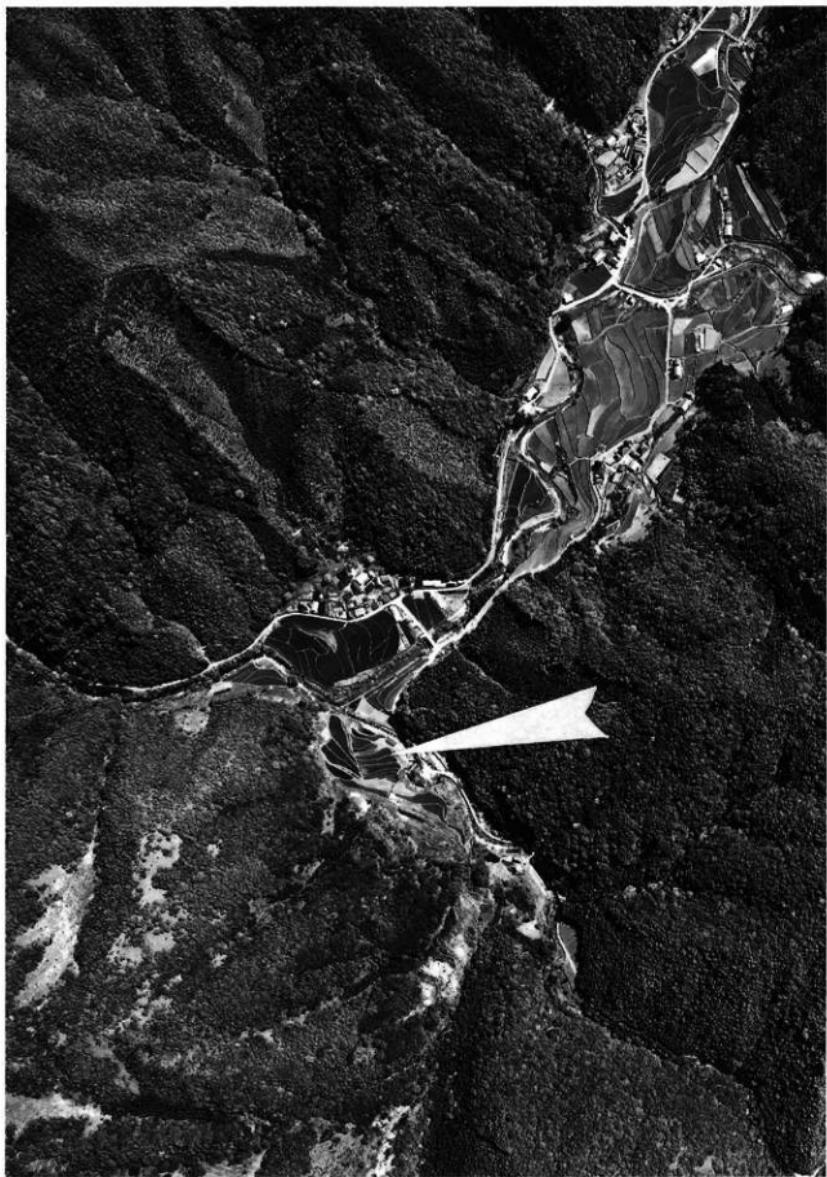
## 第6章 付 錄



おもな遺跡の消長

## 発掘調査報告書一覧表

集 分	著 書 名	発 行 年 月	現 地 調 査 期 間	調 査 地 点 名
第1集	【新横原遺跡発掘調査報告書】	昭和62年2月	昭和60年12月16日～25日	新横原
第2集	【匹見町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ】	昭和63年3月	昭和62年8月～10月	家郷里・石ヶ坪・木戸開申
第3集	【昭和62年度匹見地区象潟園場整備事業に伴う遺跡発掘調査報告書】	昭和63年2月	昭和62年11月1日～13日	家郷里
第4集	【匹見町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ】	平成元年3月	昭和63年5月16日～11月11日	上ノ田・前田・前田道ノ下・善玉町・曾利田・諒田尾・下孟ノ田・早苗山口頭・小深上ノ切・石ヶ坪・道ガテ尻
第5集	【昭和63年度匹見地区象潟園場整備事業に伴う道路発掘調査報告書】	平成元年3月	昭和63年9月16日～11月10日	前田
第6集	【匹見町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅲ】	平成2年3月	平成元年4月11日～26日	長ヶ谷・木戸ノト・先ハズミ・平田・上井分
第7集	【石ヶ坪遺跡】	平成2年3月	平成元年4月10日～7月31日	石ヶ坪
第8集	【匹見町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅳ】	平成3年3月	平成2年10月11日～12月15日	添添・太鼓野・草田・イセ・ヨレ
第9集	【木戸ノト・A道路・長ヶ谷・ド正ノ道跡】	平成3年3月	水田ノト～平成2年4月10日～8月25日 長ヶ谷～平成2年6月4日～7月17日 下正ノ道～平成2年6月20日～7月20日	水田ノト・長ヶ谷 下正ノ道
第10集	【匹見町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅴ】	平成4年3月	平成3年11月5日～7月29日	下手・和田
第11集	【ヨシ遺跡・イセ遺跡・筆田遺跡】	平成5年3月	ヨレ～平成3年4月8日～9月9日 イセ～平成4年4月19日～9月4日 筆田～平成4年6月26日～8月7日	ヨレ イセ 筆田
第12集	【佐賀園場整備事業に伴う下手遺跡発掘調査報告書】	平成5年3月	平成4年4月13日～7月29日	下手
第13集	【匹見町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅵ】	平成6年3月	平成5年4月～12月	前田中・ダヤ前・ツケ上・料兵衛
第14集	【主要地方道6号線特徴改良工事に伴う右石頭道路発掘調査報告書】	平成6年3月	平成4年10月12日～11月13日	右石頭
第15集	【匹見町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅶ】	平成7年3月	平成6年12月5日～22日	田中ノ虎・人町・山屋・森町
第16集	【前田中遺跡】	平成7年3月	平成5年7月18日～9月10日 (追加調査11月6日～12日)	前田中
第17集	【島根県匹見町上ノ原遺跡の発掘調査】	平成7年3月	平成5年7月13日～23日	上ノ原
第18集	【匹見町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅷ】	平成8年3月	平成7年11月1日～12月20日	古落代・塚ノ町・庵屋敷・麻田・泓ノ切
第19集	【匹見地区象潟園場整備事業に伴うダヤ前遺跡発掘調査報告書】	平成8年3月	平成6年9月21日～12月2日	ダヤ前
第20集	【匹見町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅸ】	平成9年3月	平成8年10月16日～12月19日	殿型敷・門田・清左衛門・中ノ原
第21集	【田中ノ虎遺跡】	平成9年3月	平成7年4月17日～9月18日	田中ノ虎
第22集	【木戸ノトB道路】	平成9年3月	平成7年9月11日～10月11日	木戸ノト
第23集	【匹見町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅹ】	平成10年3月	平成9年10月27日～11月21日	九郎・脚田・中ノ坪
第24集	【塚ノ町遺跡】	平成10年3月	平成8年4月8日～7月4日	塚ノ町
第25集	【長通跡】	平成10年3月	平成8年9月10日～9月18日(分布調査) 平成8年9月24日～10月29日(本格調査)	長通
第26集	【三島地区墓室整備促進事業に伴う発掘調査報告書・戰国時代の廻屋敷遺跡】	平成11年3月	平成9年4月8日～8月8日	殿型敷
第27集	【匹見町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅺ】	平成11年3月	平成10年4月15日～5月29日	銀城跡
第28集	【三島地区墓室整備促進事業に伴う篠塙遺跡・中ノ坪遺跡】	平成11年3月	平成10年7月6日～10月15日	中ノ坪
第29集	【「団体488号號道沿バイパス改良(改築)工事に伴う、銀城跡】	平成12年3月	平成10年6月1日～10月23日	銀城跡
第30集	【匹見町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅻ】	平成12年3月	平成11年4月21日～4月30日 平成11年12月8日～平成12年1月18日	五百田・山根ノ下・舟戸・小出解・家ノ前・上ノ原
第31集	【(主)六日市匹見元組工区県半道道路改良工事に伴う発掘調査報告書・石ヶ坪A道路】	平成12年2月	平成11年5月17日～10月1日	石ヶ坪
第32集	【三島地区墓室整備促進事業に伴う発掘調査報告書・五郎山遺跡】	平成12年3月	平成11年5月6日～8月26日	五郎山



調査地点鳥瞰

図版 2



1. 北東側からみた遺跡の全景



2. 合流地の南側にみえる遺跡の全景



3. 東側からみた遺跡の近景



4. A調査区の発掘風景



5. B調査区の西壁南半（北東から）



6. B調査区の西壁南半（南東から）



7. C調査区の北壁



8. D調査区の北壁（南西から）



1. D調査区に西壁（南東から）



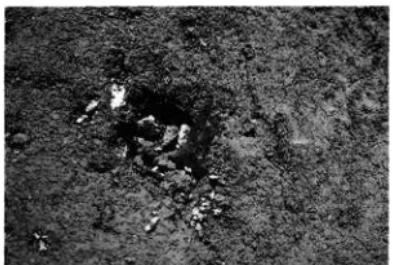
2. 下位層に陥入した4層黒灰色土



3. 土器の出土状況



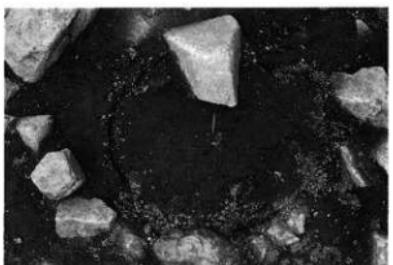
4. 土器の出土状況



5. 石鎌の出土状況



6. SK32の表出状況（C調査区）

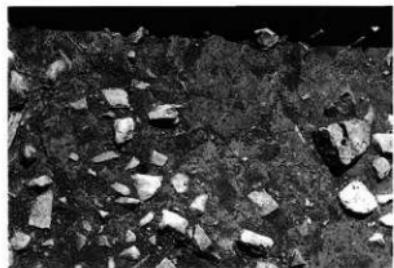


7. SK03の表出状況（A調査区）

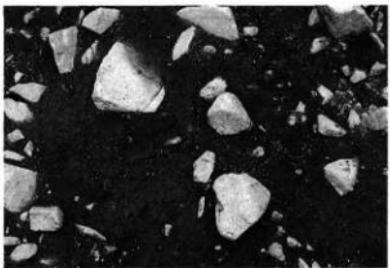


8. SK07の表出状況（A調査区）

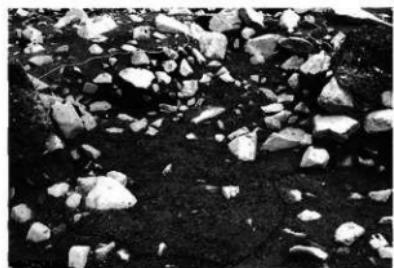
図版 4



1. SK03の表出状況（A調査区）



2. P02・SK19の表出状況（B調査区）



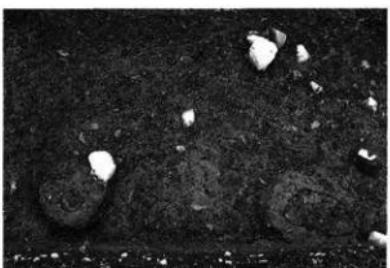
3. SK06の表出状況（B調査区）



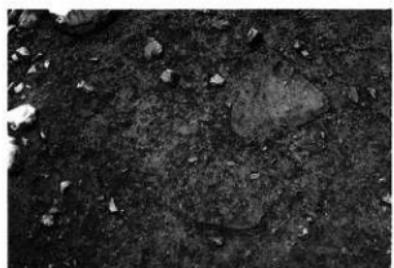
4. SK10の表出状況（A調査区）



5. SK29・SK30の表出状況（C調査区）



6. P03・SK33の表出状況（D調査区）



7. SK38・SK39の表出状況（D調査区）



8. SK38の半截状況（D調査区）



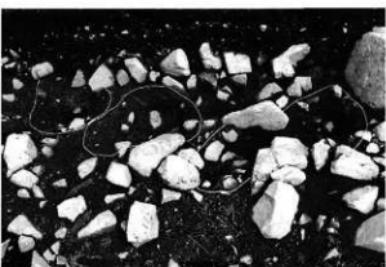
1. A調査区の遺構完掘状況（北から）



2. B調査区のP02・SK19・SK20（東から）



3. C調査区のSK28（北から）



4. D調査区のSK34・SK35・SK36（西から）



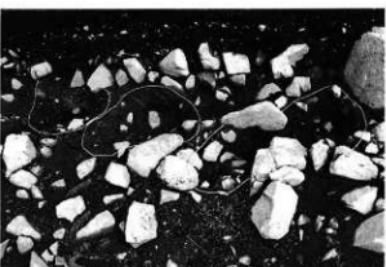
5. B調査区の遺構完掘状況（南から）



6. C調査区の遺構完掘状況（北から）

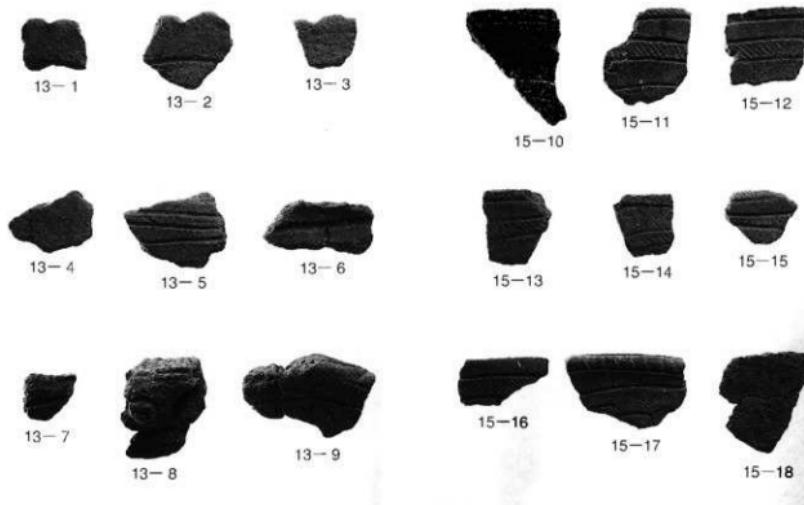


7. D調査区の遺構完掘状況（北から）



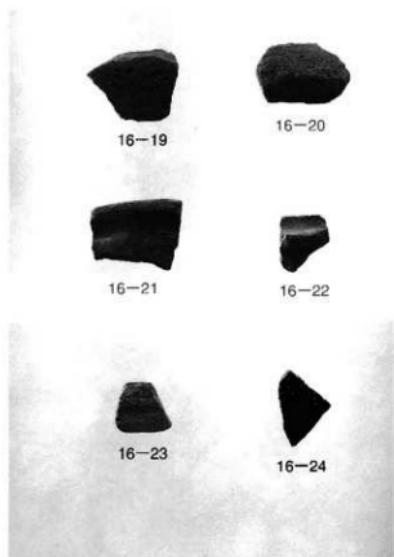
1. A・B・C・D調査区遺構完掘状況（北西から）

図版 6

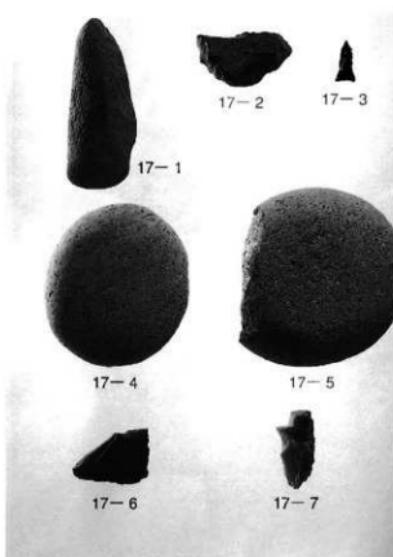


1. 繩文土器

2. 繩文土器



3. 繩文土器・瓦器質・土師質・須恵質類



4. 石 器 類

---

平成12年3月23日 印刷  
平成12年3月30日 発行

匹見町埋蔵文化財調査報告書第32集

**五百田遺跡**

発行 匹見町教育委員会  
島根県美濃郡匹見町大字匹見1260

印刷 株式会社 谷口印刷  
島根県松江市東長江町902-59

---